見明物止鏡、翫物止玉、射放物止弓矢、打斷物止大刀、馳出物止御馬、○略下

〔九條殿遺誡〕先起稱屬星名號七遍、○略註次取鏡見面、次見曆知日吉凶、次取楊枝、向西洗手、

〔淵鑑類函服飾三百八十〕鏡五　漢李尤鏡銘曰、鑄銅爲鑑、整飾容顏、修爾法服、正爾衣冠、

〔山堂肆考器用三十八〕朱梁時趙凝氣貌甚偉、每整衣冠、使人持巨鑑前後照之、烏巾上微有塵、卽令侍妓持紅巾拂拭之、

〔枕草子四〕ありがたきもの

いときよげなる硯ひきよせて文かき、もしは鏡こひて、びんなどかきなをしたるも、すべてをかし、

〔榮花物語歌合三十二〕藏人俊經ふたあゐのうつくしきとりて、ひろげ玄くをみれば、むらさきのふせんれうに、あをきざうがんをつけて、伊勢海と云さいばらを、あし手にぬひたり、かゞみの水かねのすなごしたるすはまを、すへみち、さだあきらとりて、うちしきのうへにふす、○略中かずさしの物は、うちのおまへとおぼしくて、たけのだいよりぬきいでたるをかずには玄たり、かゞみの水、沈の石たてゝ、さまぐ〳〵のくさを玄たくさにて、色々のさいでしてつくりたるも、ことさらとみなせばおかし、○略中左がたかちわざと覺しくて、沈玄たんのかひずり、かゞみのみづやりなど玄たるわりご共參らせたり、

〔榮花物語根合三十六〕菊のおり物の御几帳ども、おしいでわたして、おはしますほどこそいださね、すこしさしのきて、よきほどにおしいでたる、きぬのすそ、袖口いとめもおどろきてみゆ、菊の折枝、桂のもみぢ、鏡の水などをしたるが、うすものよりすきだるうちめに、かゞやきあひたるほかげいみじうおかし、くれなゐのうちたるをながへにて、桂のかたにゑりて、青きを下にかさねて、かう染の御ありさま、えもいはず、めでたく見えさせ給、